**読書ノート（その14）**

2017.8.24/小林

**森田勇造「日本人が気づかない心のDNA」三和書籍、2017年3月**

* 昭和15年生、元東京学芸大客員教授、青少年交友協会理事長他、東京農大博士号
* 全体感として、アメリカ文化悪玉論が目につく、根拠なしの決めつけ的主張あり、戦後日本の社会に否定的、昔は良かった的な考えが散りばめられている。学術的な価値は低い（部分によるが）。
* 以下は、参考になりそうなところだけ。（ｲﾝﾀｰﾈｯﾄ等の情報を付加しています。）

稲作と神道

* 稲作以前の日本の社会は採集・狩猟社会、つまり定住して季節の巡り・季節の実りを待つ生活、採集したものは冬季にそなえ保存のため工夫することが求められた。「待つ」と「工夫」が日本人の特性としてしみついている。
* 稲作が始まると（3,500年前ごろ？）、稲作は自然からの影響を受けやすいため、天候や自然災害、病害虫などの「自然」の中にある何か不可思議な力におそれを感じるようになり、その不可思議な力に祈るようになり、これが自然の中にある神を祈ることになった。山や巨木、巨岩などの中に神を感じた。（古代神道、神道の起源）
* 人間は死んで自然に帰ることから、自然の中に神を感じていた古代日本人としては死んだ人間が神になるのは自然な感情であった。特に、長生きした先祖に対しては、その生命力にあやかろうとしてその先祖を神として拝んだ。祖霊信仰。
* 昨年7月の読書ノートの上野誠「日本人にとって聖なるものとは何か」では、自然のすべてが神となることからすべてに感謝する道徳が重んじられている、たとえば米ツブ一つに感謝する道徳。
* 稲作は水路施設を作り維持管理することが必要、植え付けや施肥、雑草取り、刈り入れなど労働集約的作業が必要、米は作るのはめんどうだが、美味で収穫量が多い。このためには、労働力を共同体で分かち合うことと価値観を共有することが必要になってくる。ムラは生活共同体になり、定着農耕で先祖代々の知り合いが共同体を構成しているから相互の信頼感が強い。共同体の防衛のためにはよそ者を排除する排他性を見せることになる。
* 参考までに（出典は忘れた）、稲作は手をかければかけるほど良い結果（豊作）をもたらすので、日本人はプロセスを重視し、そこでどれだけ努力したかを評価する。したがって、成果主義は不満が出やすい。
* 新嘗祭（11月23日勤労感謝の日）は天皇がとりおこなう収穫祭、神に新穀をお供えし、自分でも食す。今でも皇居内でおこなわれており、天皇は毎年皇居内の水田で田植え稲刈りをしている。この新穀は毎年日本の東西の二か所から献上されており、その地域の人間は新穀を媒介として天皇と親子関係が結ばれる。（蛇足ながら、天皇主義的傾向のある和辻哲郎は天皇と国民の間の関係が国家を成り立たせていて、その関係における倫理つまり臣下としての倫理も社会秩序として重要と考えていたのではないだろうか。倫理観を天皇という一点に集中させる考え方は、やはり全体主義につながるように思う。）

日本人の道徳心

* 日本人の道徳心は、恥の感情からきている。先祖代々顔見知りの定住社会では、一度恥をかくと次世代・次々世代までその恥を引きずることになり、ムラの住人から労働力の協力を円滑に得られないと日常生活に支障が出る。これが非道徳的なことはしないという抑止力になる。
* 参考として。昨年7月の読書ノートの新田健一「組織とｴﾘｰﾄたちの犯罪－その社会心理学的考察」では、日本人犯罪者の罪悪感は家族に迷惑をかけたことが罪悪感になっている。自我が家族と同一化している（独立していない）ことから、犯罪者は被害者への謝罪より「家族に迷惑をかけて申し訳ない」とまず家族に謝罪してしまう（まさに、依存の関係、甘えの関係）。この家族へ迷惑をかけないようにすることが日本人の犯罪抑止力になっている。

稲作と遊牧・牧畜

* 日本の稲作ムラ社会は同質的な人間で先祖代々顔見知りの生活共同体なので信頼関係が基本になる。だから約束ごとはあいまいで原則だけわかっていれば事足りる。これに対して、遊牧社会は牧草をもとめて移動生活をしている。牧畜社会は定住するのが基本だがその土地がやせれば家畜を引き連れて移動が可能。遊牧も牧畜も土地にしばられない。そういえば、ヨーロッパの4～8世紀には民族大移動があったが、土地にしばられていな社会という背景があったから民族が移動。アジア・ヨーロッパ大陸は陸続きで他民族・他部族社会なので、生活の拠点を移せば非同質的な人間と出会い紛争になる可能性がある。そうすると、約束ごとを条文化する必要がでてきて契約社会となる。

以上